令和７年８月２９日

ハムフェアで感じたこと、学んだこと

佐々木　朗　JH８CBH

「たくさんの方とお話して、しっかり勉強してくる」そういう目標を立てて、東京ハムフェアに出かけました。学んだこと、感じたこと、得たものをまとめてみます。

１　羽田からの小さな旅

羽田に到着したのは、午前 11 時少し前。何とかお昼までに会場へ着きたいと思い、事前に調べたルートは、モノレールで天王洲アイルへ、そこから臨海線で国際展示場、さらにゆりかもめで有明テニスの森へ向

かうというものでした。所要時間は約１時間。モノレールには浜松町まで止まらない直通もあるため、乗車時には注意が必要です。

飛行場のトンネルを抜けると、目の前に広がるのは大都会。函館に住んでいる者にとっては、やはり感激の瞬間です。

２　乗り換えの工夫と都会の洗礼

天王洲アイルでの乗り換えは少し大変でした。案内は出ているものの、「あと 300m」の表示には思わず「ギャ」と声が出そうに。でも、「あと○m」という表示が励みになり、無事に乗り換え完了。

国際展示場駅に着くと、２年前に訪れた懐かしい建物が目の前に広がっていました。遠くに「有明テニスの森」駅が見えましたが、体力温存と「ゆりかもめに乗ってみたい」という気持ちもあり、一区間だけ乗車。北海道では体験しないような暑さを感じながらも、「物珍しさで楽しんだ」と思うことにして、会場へ向かいました。

３　昼食の準備とちょっとした交流　娘さんと一緒に会場に来た JA1の Ｓさん

ちょうどお昼前だったので、先に

食事を取ることに。ビッグサイトでの経験から「お昼は混む」と予測し、函館でおにぎりセットを購入してリュックに入れておきました。これが大正解。ロビーで空いているベンチを見つけ、そこで腹ごしらえ。隣で聞こえてきたのは、お父さんと娘さんの会話。あまりアクティブでないお父さんを娘さんが連れてきたようで、娘さんの方が積極的にオンエアされている様子。お父さんはJA1の大先輩で、娘さんにしっかりと受け継がれているようでした。「東京って暑いですね」と娘さんに話しかけると、「どちらからいらしたんですか？」と返ってきて、自然と会話が弾みました。名刺を差し上げると、お父さんの方が丁寧に住所と名前を書いてくださり、「巣鴨」とのこと。JARLの旧本部の近くで、草創期からアマチュア無線を楽しんでこられた方だと知り、感慨深いものがありました。

4　会場での再会と、私の大切なモールス講習会仲間　JM8QXH 蔵重さん

会場では、R7モールス講習会の受講生である蔵重さんとご一緒することができました。蔵重さんは、独学でモールス練習を続けていたものの、なかなか「点と棒」から抜け出せずに悩んでいたそうです。そんな折、秋号の『JARL NEWS』を見て講習会への参加を決意されたとのこと。努力の末にここまで来られたことに、深い敬意を覚えました。

この日は、蔵重さんと一緒に行動することができ、心強く感じました。

R7講習会は、実質90回にも及ぶ長丁場でしたが、見事に皆勤賞。継続する力と情熱に、改めて感動しました。

5　南極ブースの感動　JH7JCX 氏家さん

今年の支部大会では、当初、総合通信局の方に電波障害についてご講演いただく予定でしたが、急な都合により実現せず、どうしたらいいものかと頭を悩ませていました。そんな時、真っ先に思い浮かんだのが氏家さんです。

氏家さんとは、3年前に八戸で開催された青森県支部大会でお話を伺ったことがあり、その際の「南極での体験談」があまりにも感動的で、今でも鮮明に記憶に残っています。そこで、思い切ってjarl.comのメールアドレスにご連絡を差し上げたところ、すぐにご返信をいただき、とん

とん拍子で北海道までお越しいただけることになりました。

今回も、ハムフェアの南極ブースに毎年のようにいらっしゃるとのことで、ご挨拶に伺いました。氏家さんは、にこやかに迎えてくださり、その瞬間から心が温まり、ハムフェアの一日が気持ちよくスタートしました。

6　ZOOM でつながったモールスの絆 JLRS の JR2FBM岩橋さん

岩橋さんは、渡島檜山支部で企画した ZOOM を使ったモールス講習会の一期生です。令和 4 年の実施だったため、私たちは親しみを込めて「R4 講習会」と呼んでいます。
あの時は、27 名もの受講者が集まりました。以降、R5・R7 と 3 回実施していますが、初回が最も多くの方にご参加いただきました。というのも、私自身が交信した多くの方々に案内メールをお送りしたからでしょう。1,000 通以上、送ったかな。

講習会は 1 月 11 日から 3 月 31 日までの約 3 か月間。テレビ電話を使った講習は初めての試みで、どんな速さで進めるか、どんな内容にするか、すべてが手探りでした。第 1 回を進める中で、ランダム練習に加えて、コールサイン・名前・JCC を取り入れたり、個人面談を設けたりと、さまざまな工夫を重ねました。

そして迎えた 3 月 31 日の修了式。画面越しに涙を流す方もおられ、感動的な締めくくりとなりました。全員とは言えませんが、多くの方が実際の交信の世界へと巣立ち、「ZOOM を使った講習会は十分に可能だ」と確信することができました。

岩橋さんも R4 講習会の受講生の一人でした。受講にあたっては「ついていけるだろうか」と不安を抱えていたようですが、実際には人一倍努力される方で、全 80 回の講習を一度も欠席することなく、毎日のように復習に励まれていました。

岩橋さんと初めて CW で交信できたのは、2023 年 3 月 21 日。その瞬間、何かが切り替わったようで、その年のハムフェアにはご夫婦で来場され、初めてアイボール QSO を交わすことができました。

その後、JLRS にも入会され、今では中心メンバーの一人として活躍されています。まさに「努力が実を結んだ」素晴らしい歩みです。

今は、和文にも挑戦中と言うことで、ものすごいスピードで、CW の世界に入り、ゆくゆくは牽引する立場になる方だなあと感じました。

学校での教え子ももちろんかわいい存在ですが、R4 以降に続いた 3 回の講習会の受講生たちは、今では私

にとって大切な友人たちとなりました。（左から、岩橋さん、私、蔵重さん）

7　東京都支部との交流と記念誌から得た学び　JARL 東京都支部 JG1DKJ の澤田さん

ハムフェアの会場で、ひときわ元気な皆さんが集まっている場所がありました。それは東京都支部のブース。実は、昨年の渡島檜山支部 50 周年記念誌を編集する際、東京都支部には大変お世話になったのです。

私自身の手元にあったのは、30 周年と 40 周年の記念誌のみ。「もう少し勉強しないと」と思い、全国各支部のホームページを巡って記念誌を発行しているところを探しました。すると、東京都支部が記念誌を発行していることがわかり、思い切って連絡を取ってみました。すると、なんと有料の記念誌を 2 冊も送っていただけることに。会員数こそ桁違いですが、それぞれのクラブの様子が丁寧に紹介されており、支部の活動も豊富に掲載されていました。「とてもかなわない」と感じつつも、「これを一つの目標にして、どこまで頑張れるか挑戦してみよう」と思わせてくれる、そんな記念誌でした。

ハムフェアでは、澤田支部長が実行委員としてご多忙の中、優しく声をかけてくださいました。「せっかく北海道から来たんだから」と言って、東京都支部の皆さんと一緒に写真も撮っていただきました。

さらに、「渡島檜山支部と何かコラボしたいね」ともお声がけいただき、心が躍るような気持ちになりました。今は距離が離れていても、オンラインやデジタルツールを活用すれば、支部間の連携も十分に可能な時代です。

大きな支部と、極小さな支部。それぞれの強みを活かしながら、何か新しいことができるかもしれない。そんな可能性を楽しみながら、これからも考えていきたいと思います。

8　奇想天外なコンテストと、企画力への刺激　横浜クラブ　JH1 の E さん

7 月に交信した際、「ぜひ東京ハムフェアでお会いしましょう」とのお話があり、横浜クラブが出店されるとの情報をいただいたので、さっそく訪問させていただきました。7N1 の K さんも同席されており、和やかな雰囲気の中で、さまざまなお話を伺うことができました。

中でも印象的だったのが「オール横浜コンテスト」の話。まさに奇想天外なコンテストです。開催は「海の日」のの祝日の午前 5 時から 7 時までの、わずか 2 時間。しかも周波数は 28MHz のみ。通常の「みんなが出られるように」と開催時間を延ば

す発想とは真逆で、早朝という大胆な設定です。お出かけ前の時間帯を狙ったこの企画、ログは相手局との照合が必須で、いくら頑張っても相手がログを提出しなければ得点にならないという厳しさもあります。マルチは横浜市内の 18 区と市外の 19 エリア。すべてのマルチを取って初めて「土俵に上がる」感覚。開けるか開けないかで点数が大きく変わる中、250 以上のログ提出があるというのは驚きです。「会員数が多いから」という理由もあるかもしれませんが、それ以上に「魅力的なコンテストとは何か」を考えるヒントをたくさんいただきました。

渡島檜山支部でも、「みんなが出られるように」と丸 2 日間の開催としていたコンテストを、今年は一日勝負に変更。48 時間に短縮し、マルチも整理しました。ポスターも新たに制作し、支部報会員には同封して案内しました。

結果がどう出るかはこれからですが、「企画力が試されるな」と改めて感じています。横浜クラブのような大胆な発想と、地域に根ざした工夫をどう融合させるか。支部の規模に関係なく、魅力あるコンテストを作ることは可能だと信じています。

9　アマチュアバンドを守る人　JA3 のTさんの思いに触れて

SHF 関係のパーツの並ぶ中、10GHz の A3 の記録が掲示があるブースに立ち寄りました。A3 は、昔のモードと自分自身の中ではなんとなく整理していましたが、ここのところ 7MHz や 50MHz の A3 が話題になることも多いようです。A3 の魅力は私の押さえとしては、送信受信回路が比較的容易で、自作に向いているということぐらいでした。

「なぜ、10GHz で A3 が」という疑問は、T さんとよくお話して分かりました。尽きない技術への興味と言うのもあると思いますが、「バンドを守る」ということが心に残りました。今、特に高い方の周波数は、あらゆる方面で求められています。そんな中、144MHz，430MHz，1200MHz，10.125GH z などは、一次業務となっており、2400MHz，5600MHz は二次業務（一時業務に有害な混信を与えない措置を取る）となっております。私も詳しいことはわかりませんが、それぞれのバンドでも許可されている電波型式とそうでないものがあるようです。例えていうなら 28MHz 帯を除く短波帯で FM が許可されていないということかと予想します。A3 は、今のところ、全部のバンドで許可されているそうです。T さんが言うには、「使っていないと『いらないんじゃないの』と関係当局に言われた時、答えようがない。」と言うことです。自らの実践でアマチュアバンドを守るということに努力をされていることを学びました。

また、こんな新しいことも学びました。「AM と FM どっちが音がい

い？」たぶん 100%近くの人はＦＭと答えると思います。ところがノイズなどが全くない環境では AM の方に軍配があがるそうです。アマチュアの無線機では、高音部を２kHz でカットしているために、近いところでは、AM の方が音質がいいそうです。と聞いてもピンときませんが、興味のある方、是非聞き比べて見てください。

バンドを守るお話も聞きました。私たちにも苦い経験があります。歴史をひもどくと昭和 35 年に 144MHz～148MHz まであったバンドが 144MHz～146MHz まで削られたという歴史があります。その代替え措置と言うのでしょうか昭和 38 年には、430MHz～440MHz までアマチュア局に免許になっています。当時は、「そんな高い周波数をもらったって、しょうがない。」という声も多かったようですが、これが正解だったことは歴史が証明しています。このあとも、1.9MHz，3.8MHz が、アマチュア無線に解放されています。1979 年のワークバンドの解放で、10MHz 帯，18MHz 帯，24MHz 帯が新たにアマチュアバンドに加わったのももう、だいぶ昔のことになってしまいました。

講習会で教える時も、「アマチュアバンドは、先駆者たちの苦労のもと、周波数が貴重な今でも、アマチュア用に割り当てられています。アマチュアバンドを守っていくためには、私たち一人一人が、きちんと使うことが大切です。コールサインを言わない文化なのかもしれませんが、皆さんが勇気をもってコールサインをきちんと言う文化を作っていきましょう。」というような話を必ずします。

講習会では、必ずこう伝えています。「アマチュアバンドは、先駆者たちの苦労のもと、今も貴重な周波数がアマチュア用に割り当てられています。これを守っていくためには、私たち一人ひとりが、きちんと使うことが大切です。コールサインを言わない文化なのかもしれませんが、皆さんが勇気をもってコールサインをきちんと言う文化を作っていきましょう。」

今回のＴさんの「バンドを守る」という思いも、しっかり心に刻みたいと思います。

10　青少年の育成とアマチュア無線の未来 JF3 のＫ先生と生徒たちの挑戦

先生の勤める学校は、部活動も非常にアクティブで、近隣の工業系大学との交流も盛ん。高校生の進学支援にも一役買っているとのことで、アマチュア無線を通じた地域連携の好例と言えるでしょう。

全国の高校生が集まったミーティングでは、パーツを使った半田付けの芸術作品の展示もありました。ともすれば「やけどする」「危ない」と敬遠されがちな半田付けですが、コツをつかめば器用な生徒たちが見事な作品を仕上げていました。会場に

は、きれいに半田付けされた作品がずらりと並び、技術と創造性の融合を感じさせました。

K先生は、「自校でアマチュア無線クラブを立ち上げるのは難しい」とも語っておられました。クラブ活動を指導できる人材が限られている中で、複数の学校をかけ持ちながら生徒たちを指導する体制も、今後の可能性として考えられるとのこと。これは、地域や支部が連携して支援することで、より多くの若者にアマチュア無線の魅力を届けられるヒントにもなりそうです。

11　電気の散歩道で出会った科学の魔法　JF1のMさん

「電気ってなあに？」「磁石って？」――そんな素朴な疑問に応える、子どもたちの科学心をくすぐる展示が並んでいました。案内してくださったのは、関東地方本部長のJF1のMさん。そのブースには、見て・触れて・考えることができる実験がずらりと並んでいました。

- 磁力線を遮る実験
- 電気エネルギーを運動エネルギーに変え、さらにそれを電気に戻す実験
- コイルに磁石を通すことで電気が流れる様子を示す実験
- リニアモーターカーの原理を体感できる実験
- 渦電流を使って硬貨を分類する実験など

私自身も、目を輝かせながら「どうしてこうなるんだろう？」と、頭の中で電気理論をフル回転させながら楽しみました。子どもたちもたくさん訪れていて、手を動かしながら実験に夢中になっている様子がとても印象的でした。

「函館でもぜひ子どもたちに見せたい」と申し出たところ、Mさんは「送料を持っていただければ、喜んでお貸しします」と快く応じてくださいました。

これから冬に向けて計画している蔦屋でのイベントでも、ぜひこの「電気の散歩道」を再現し、函館の子どもたちにも科学の不思議に触れてもらいたいと思っています。目を輝かせる子どもたちの姿、驚きと発見に満ちた表情――そんな瞬間を、ぜひ地元でも生み出したいと頭の中で描きました。

12　フリーライセンス　JF1のUさん

最近注目を集めている「ライセンスフリー無線」。その名の通り、免許不要で楽しめる無線通信の分野です。アマチュア無線人口が減少傾向にある中、この分野はむしろ右肩上がりの成長を見せているとのこと。JF1のUさんに詳しく話を伺いまし

た。

ライセンスフリー無線の種類と特徴

種類	周波数帯	出力	特徴
CB無線	27MHz帯	～0.5W程度	電離層反射により1000km以上の交信も可能。技適取得が必要な場合も。
特定小電力（特小）	422MHz帯	10mW	身近で使いやすく、山岳地では100km以上の交信も可能。
デジタル簡易無線（デジ簡）	351MHz帯	5W	車載機もあり、申請のみで使用可能。5年間の免許が必要。

多くのライセンスフリー愛好者は、アマチュア無線の免許も取得しており、ブース出展者も全員がコールサインを持っていました。

特小は、アマチュア局の体験局よりもさらに自由度が高く、交信の楽しさを気軽に味わえるのが魅力です。子どもたちにとっては、無線の世界への入り口として最適であり、そこから「免許を取ってみようかな」と自然に興味が広がることが期待されています。

山の上同士でスケジュール交信を組み、意外な飛びを楽しむなど、距離の制限を逆手に取った遊び方も魅力のひとつです。

一方で、耳の痛い話も「アマチュア無線には、悪い意味でのOMがいる」という声も。「CWを覚えなきゃ」「半田付けもできないのか」といった、敷居を高くしてしまう言動が、初心者の意欲を削いでしまうこともあるようです。アマチュア無線の楽しみは本来、広く、自由であるべきもの。紹介する際には、押しつけにならないよう、自分自身も含めて気をつけたいと思いました。

13　電波文化祭　JN1のOさん

東京ハムフェアには、驚くほどの力を持った方々がたくさんいらっしゃるのだなと、改めて感じました。この電波文化祭のブースも、その一例です。

12月7日に入間市で開催される電波文化祭は、主催者自身がブースを出展するのではなく、出展者を広く募集するという形式で行われるそうです。年に2回開催され、毎回数百人の子どもたちが来場するとのこと。まさに地域に根ざした、知的好奇心を刺激するイベントのようです。

私は、5月に函館市地域交流まちづくりセンターで開催されたIT電子工作などの展示に行ったことを思い浮かべながら、この文化祭の様子を想像しました。これほどの規模と内容であれば、子どもたちの「ドキド

キ」「わくわく」を十分に満たすことができると感じました。

そして何より、「子どもたちの知的領土を広げる。」という言葉が、心に深く残りました。

14　東京湾ハムクラブ　JL1 のＡさん

アマチュア無線の社会貢献活動の一環として、非常通信の訓練についてお話を伺いました。

TEAM7043 は、2011 年の東日本大震災の際、7.043MHz で東北地方に呼びかけたことをきっかけに結成された全国規模のアマチュア無線通信ボランティア団体です。

この TEAM7043 を中心に、9 月 7 日に全国的な非常通信訓練が実施される予定です。

訓練は 7.123MHz を使用し、赤十字無線奉仕団 TEAM7043 のメンバーなどが中心となって行われます。

災害時の通信手段としてのアマチュア無線の重要性を再確認し、実践的な対応力を高める貴重な機会です。関心のある方は、ぜひ耳を傾けてみたいと思います。

15　ボーイスカウト　JL1 のＫさん

国内のメンバーが集まるジャンボリーでは、アマチュア無線の体験運用が行われるそうです。実際に交信を体験することで、無線の魅力を肌で感じる貴重な機会となっています。

最近では、JARL も育成体制を応援してくれるようになり、若者へのアプローチが広がりつつあります。ジャンボリーでは、無線だけでなく電子工作などの体験プログラムも用意されているとのこと。こうした活動が一過性の体験で終わるのではなく、継続的な興味や学びにつながる仕組みづくりが今後の課題となっています。

ジャンボリーは全国組織であり、災害時の協力体制など、アマチュア無線と親和性の高い活動も多く見られます。だからこそ、全国の指導者が連携し、人材育成に力を注ぐことで、若者のアマチュア無線人口を増やす大きな可能性を秘めた組織だと感じました。

未来のオペレーターたちが、こうした場をきっかけに無線の世界へと踏み出してくれることを願っています。

16　板橋教育科学館　JQ1 のＳさん他

この教室では、毎月 2 回の定期イベントが開催されており、毎回 40 名以上の来場者が集まるそうです。中でも人気なのが、「親子 de アマチュア無線体験局」。隔週で行われており、親子で一緒に交信を楽しむ姿が見られるそうです。また、電子工作も子どもたちに好評で、ものづくりの楽しさを通じて無線への興味を広がりますね。

こうした活動に対して、行政からの直接的な支援が得られていることは非常に心強く、地域ぐるみで育成を支えている様子がうかがえます。

さらに、国際宇宙ステーション（ISS）との交信も計画されているとのこと。ISS では国際標準時（UTC）が使われており、宇宙飛行士との交信は土日の日中が中心。地球にいる子どもたちと時間を合わせるのは、なかなか難しい調整が必要だそうです。

ISS からの電波はホイップアンテナでも受信可能ですが、交信時間は約 15 分間と限られているため、確実に電波を捉えるには、クロス八木アンテナを用いた追尾システムが必要になります。さらに、予備のリグ（無線機）なども含めると、かなりの準備が必要とのこと。技術と情熱が詰まった挑戦です。

東京都板橋区では、アマチュア無線団体が区と協定を結び、防災訓練にも参加しているそうです。学校の先生や教育関係者も多く関わっており、運営体制がしっかりしていることが大きな強みとなっていることを感じました。こうした地域の取り組みは、アマチュア無線の魅力を次世代へと伝える大きな力になっており、人材育成と災害対応の両面で社会に貢献できる可能性を感じました。

17　JARL 高岡クラブの歴史と技術力を学びました。　JA9 の B さん

高岡クラブの歴史は、相当に古く昭和 32 年の発足。70 年近くの歴史を持ちます。特に目を引いたのは、会報のＣＰ高岡。「ＣＰって何でしょう。」にこたえられるのは、相当に法令を勉強している方と言うことになりましょうか。普通は、不特定多数の呼び出しにはＣＱを使いますが、特定地域を呼び出す場合に使うのがＣＰということです。機関誌名としては、「なるほど」ですね。机の上に並べられていた会報は、季節ごとのようでした。会長さん自らが執筆しているそうです。パラパラとめくらせていただきましたが、会の事業の他、かなりの技術的な話題で占められていました。

また、制作会なども盛んにおこなわれ、技術力の高いクラブなのだろうなあと思いました。製作会には支部の方からの応援もあるそうです。

18　JARL 製作ブース　JH1 のＫさん

JARL の制作ブースでは、「親子で製作会」として、モールス通信キットと FM ラジオの体験が行われていました。どちらも 500 円で、その場で製作し、持ち帰ることができるという手軽さが魅力です。

受付で取材をしていたところ、「あの方が本家本元ですよ」と紹介されたのが、K さん。制作指導の真っ最中でしたが、快く迎えてくださり、私も一緒に見学させていただきました。今回のモールス通信キットは、

送受信機が 2 台で 1 セット。木製の縦ぶれ電鍵、発信機、スピーカー、発光ダイオード（LED）、受光器で構成されています。電鍵を押すと LED が点滅し、数メートル離れたもう一方のキットがその光を受光器で受け取り、発信機が鳴る仕組みです。自分の打った符号は、手元の受光器にも届くため、モニターとしても機能します。

この仕組みを目の当たりにして、思わず「これはすごい」と感動しました。アマチュア無線に親しんでいる方なら、すぐにその動作原理が理解できるでしょう。

K さんは、お母さんと小学生の娘さんの制作を丁寧に指導されていました。私がお邪魔した時には、ちょうど完成間近。部品はすべて差し込むだけで組み立てられるようになっており、半田付けによるやけどのリスクを避ける工夫がされていました。少し寂しい気もしましたが、現実的で安全な配慮だと感じました。

親子で完成させたキットを使って、離れた場所で実験。一発で成功し、会場は笑顔に包まれました。

このキットは、構想から下準備まで K さんが中心となって制作されたそうです。ご自宅では「毎日ノコギリで何を切っているの？」と聞かれながら、台座を手作りされたとのこと。その情熱と工夫が、子どもたちの笑顔につながっているのだと思うと、胸が熱くなります。

会場はゆったりとしたスペースで、親子ペアがあちこちで制作に取り組んでいました。インストラクターも多数配置され、和やかな雰囲気の中で製作会が進められていました。

ものづくりは、単に「作る」だけではなく、何を作るか、難易度はどうか、完成した時の感動、その後どう活用されるか・・・、こうした多角的な視点が大切だと改めて感じました。今回のモールス通信キットは、家で日常的に使われるかは分かりませんが、電気の面白さを伝える教材としては、これ以上ないほど感動的な体験でした。

19　TOP GUN クラブ

世の中には本当にさまざまなアマチュア無線クラブがあるものだなあと、改めて感じました。今回ご紹介する TOP GUN クラブも、そのひとつです。

このクラブの主な活動は、毎週土曜日の朝 7 時に行われるロールコール。参加者が一斉にキー局を呼び、最も早く交信できた人が勝ちという、まさに腕試しの場です。

驚いたのは、クラブのメンバーになるためには 500W 以上の局免許が必要という点。つまり、一定以上の空中線電力で安定した通信を行うことが前提なのです。パイルアップ（同時に多数の局が呼びかける状況）を想像するだけで、ちょっと怖くなってしまいました。

私自身も 500W で通信することは

ありますが、「通信は必要最小電力で」という原則を考えると、さすがにその点について質問するのはためらわれました。とはいえ、こうした高出力・高技術志向のクラブが存在すること自体、アマチュア無線の奥深さを感じさせます。

ロールコールへの参加は自由とのことですが、腕試しするには勇気がいるなあというのが正直なところです。

20　工人舎　Ｔさん

「無線の飛びを一番左右するものは何か」と尋ねられたら、無線機と答える人はほとんどいないでしょう。多くの方が「アンテナ」と答えるはずです。私のお気に入りは、工人舎のバーサビーム KA1-406。現在はサイズの関係で販売終了となり、小型版の KA1-406S が後継として登場していますが、私にとってはこのアンテナとの出会いが本当に良かったと感じています。

バーサビームは、グラスファイバーの中に巻き尺状の銅エレメントが仕込まれており、ブーム中央のステッピングモーターによってバンドに応じた長さに自動調整されます。すべてのエレメント長はコントローラーで制御されるため、広い 7MHz 帯でも CW から 7.1MHz 以上まで、どこでも最適な長さとなり、私の場合は SWR が 1.0〜1.1 に収まります。

KA1-406 は、7MHz・10MHz 帯は 3 エレメント（7MHz は短縮型)、14MHz 以上〜50MHz 帯：5 エレメントのフルサイズとして動作します。

特に、子どもの頃から憧れていた「3 エレ」は痛快そのもの。そこそこのパイルアップでも一、二度で勝ち抜けることが多く、コンディションが悪い時でも「バンド内で聞こえるのは佐々木さんの信号だけです」と言われたこともありました。

一方、アンテナの長さをモーターで制御するという構造は非常に繊細です。雷の誘導電流の影響か、何度かコントローラーのチップが飛んだこともありました。また、5 年に一度程度のメンテナンスは欠かせない方が長持ちするということで、3 年ほど前、6 つの制御装置をまとめて工人舎に送って整備してもらいました。

工人舎の魅力は、何と言っても仕事の速さ。月曜日に発送すれば、金曜日には戻ってくるほどのスピードです。担当の T さんは「みんな、無線やりたいだろうから、こっちも頑張ってるんですよ」と笑顔で話してくれました。

メンテナンスで一番消耗するのは、銅のエレメントと高周波を伝える接点の部分。「佐々木さんのアンテナの時は、エレメントを一つ交換しましたよ」と教えてくれた T さん。全国にユーザーがいる中で、数年前の私のアンテナのことを覚えていてくださったことに、工人舎と T さんへの信頼がさらに深まりました。

7MHz 以上のすべてのバンドを一つのアンテナでオンエアできるバー

サビーム。新規にアンテナを設営する方、グレードアップを検討している方には、ぜひ選択肢の一つとしておすすめしたいアンテナです。

21　モールス講習会の新橋での同窓会

ZOOM を使ったモールス講習会も、これまでに 3 回開催され、CW の世界にデビューされた方が着実に増えてきました。

講習は、1 月から 3 月末まで、土日も休まず毎日開催という“鬼のような”スケジュール。それでも、毎回皆勤賞が出るほど受講生の意気込みは本物です。

全国から参加できるオンライン講習ですが、画面越しにしか顔を合わせられないのが少し寂しいところ。だからこそ、直接受講生と会える時間は、指導者として何よりの喜びです。まさに、指導者冥利に尽きる瞬間ですね。

これまでに大阪で 2 回、京都で 1 回、そして東京では今回が 2 回目、と各地で懇親の機会を持ってきました。今回も新橋で懇親会を開催し、5 名のメンバーが集まってくれました。

今回の参加メンバーは、R7 JA6KDW 上妻さん、R5 7N4WJL 小林さん、R7 JK1MYQ 榎さん、R5 JF6MZN 宮崎さん、そして、お昼からお付き合いいただいた R7 JM8QXH 蔵重さんでした。九州から来られた上妻さんとは初対面でした。

講習会での苦労話や、地元での特訓の様子など、世代を超えた交信の話題で盛り上がり、楽しい時間を過ごすことができました。

令和 8 年度も、1 月から ZOOM によるモールス講習会を開催予定です。今度はどんな出会いがあるのか。ドキドキしながらも、素晴らしい出会いになることは間違いないと確信しています。

これからも、モールスの楽しさを伝えることを自分の使命として、活動を続けていきたいと思います。

22　特別記念局　JP1HBR の藤巻さん

今年の特別記念局は、すべてリモート運用で行われているとの説明を、受付の方から伺いました。その理由のひとつが、「大型アンテナは景観上好ましくない」というもの。一般の方から見れば、確かにそう感じるのかもしれません。そう思うと同時に、もっとアマチュア無線の魅力を PR していく必要があるなあと感じました。

アンテナは都内の複数箇所に分散設置され、そこから電波が発信されています。オペレーターの前には一応無線機が置かれていましたが、実際の操作はパソコンの画面をマウスで操作しながら、PTT を押したりキーを握ったりするスタイル。まさに現代的な運用方法です。

係の方に伺ったところ、「VU のア

ンテナは遠いですが、ハンディ機でも会場の外から交信できますよ」とのことでした。私は 2 日間滞在しましたが、残念ながら 8J1HAM とは交信できずじまいでした。

オンエアは予約制で、各バンドに多くの方が運用されていました。リモート運用だと、HF 帯すべてに出ても“かぶり”が起きないという利点があることに気づきました。これは新しい運用スタイルならではのメリットですね。

今年の特別記念局も山梨県が担当。会場で「山梨県支部長の藤巻さんはいらっしゃいますか」と声をかけたところ、すぐに出てきてくださいました。藤巻さんは、非常にアクティブに運用されている方で、私も人並み以上にはオンエアしているつもりですが、その活動量には脱帽です。

もちろん、交信数が多ければ良いというわけではありませんが、お空に出ることで、会員の思いや声を受け止める機会が増えるのは間違いないと感じました。

23　JARL ブース

入会手続きや継続手続きなどで、ひときわ人の出入りが多かったのが JARL 事務局のブースでした。少し落ち着いたタイミングを見計らって、私は声をかけました。

「北海道から来ました佐々木です。いつもお世話になっております。どうぞよろしくお願いします。」そうご挨拶すると、私のことをご存じの方はすぐに気づいてくださり、にこやかな表情で応えてくださいました。その瞬間、日頃のやりとりがしっかり届いていたことを感じ、嬉しくなりました。

これまで、JN の原稿や各種パンフレットの請求、会員情報の確認など、この仕事に携わるようになってから、事務局の方々とお話する機会も多くなりました。その中で感じてきたのは、丁寧で誠実な対応への感謝の気持ちです。

今回のような場で直接お会いできることは、私にとってとても貴重で、改めて感謝の聞き持ちをお伝えすることができました。

24　品川夜景を見ながらホテルからのオンエア

新橋でのミーティングを終え、品川のホテルに到着したのは 21 時過ぎ。部屋は 10 階で、まずはロケーションにひと安心。ただ、ひとつだけ気がかりだったのが、前回の社員総会での“高層階なのに鉄網入りガラ

ス”というショッキングな経験でした。あの時は、外に出て道端からオンエアしました。

今回はどうだろうと、部屋に入ってすぐにカーテンを開けてみると「鉄網なし！ 」そして、目の前には広がる夜景。遠くには飛行機の光が見え、大空へと上がっていく様子がはっきりと確認できました。

その夜と翌朝にかけて、東京で合計 31 局と交信することができました。半数以上は、いわゆるポータブル 1 で、ハムフェアに参加していた局の方々でした。

さらに嬉しかったのは、交信した局の多くが「佐々木さんとは、7 メガで…」と、過去の交信を覚えていてくださったこと。短波帯での交信ももちろん楽しいですが、こうして都会に集まり、430MHz で気軽にお話できるのもまた格別だと感じました。

ハムフェアで学んだこと

1　若い世代と無線の未来～仕掛ける大人の責任～

ボーイスカウト、高校の連盟、イベントの企画、公的施設の活用など、これまでさまざまな活動を通じて多くのことを学んできました。

よく「若い人は無線なんかに興味を示さない」と言われますが、それは大人の側の“仕掛け不足”や、企画しないための言い訳ではないか――そんな気さえしています。

若い人たちに、科学の面白さ、無線の魅力、そしてアマチュア無線ならではの「不確実な中で交信が成立する感動」を伝えていくことは、今さらながら本当に大切なことだと感じています。

子どもたちの「それ、どうして？」「えっ、今の何？」「もう一回やって！」という素朴な驚きや好奇心こそが、科学の目を育てる原点です。そして、自分自身もそうだったように、大人が若い人を育てることで、その子たちが大人になったとき、また次の世代を育てていく、そんな循環が生まれます。

私はよく「したようにされる」という言葉を使いますが、まさにその通りだと思います。

今回の学びで、支部の行事では、自分たちが楽しむこともちろん大切ですが、同時に「次の世代を育てる事業」も欠かせないと、改めて感じました。

この冬、渡島檜山支部で蔦屋書店を会場に実施予定のイベントでは、今回得た学びをぜひ活かしていきたいと思っています。若い人たちの“科学の芽”を育てる場として、無線の魅力を伝えるきっかけになればと願っています。

2　イベントとその活動の意味

渡島檜山支部では、月に一度は何らかのイベントを実施しています。実際、イベントをゼロから企画・運営するには、相当なエネルギーと時間が必要であることを、私自身よく理

解しています。当然、支部役員の業務も増えることになります。

それを「プラス」と捉えるか「マイナス」と捉えるかは、トップや関係者の考え方次第です。イベントがうまくいくこともあれば、特に初めての試みでは失敗やお叱りを受けることもあるのが現実です。

教育の世界では「結果は長い目で見る」と言われますが、イベントにもこの考え方は通じるのではないかと感じています。総じて言えば、やらないより、やった方がいいのは間違いありません。時間と労力をかけて実施したことは、短期的にも長期的にも、アマチュア無線の発展に必ず寄与すると信じています。だからこそ、これからも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

私は仕事柄、イベントの企画・運営・準備には多く関わってきましたし、ある程度のことはこなせると思っていました。しかし、今回のハムフェア全体を通して、そして各ブースを回ってみて、自分の力不足を痛感しました。

トップの方の人格、交渉力、調整力・・・。そのどれもが、自分とは比べものにならないほど高いレベルで、足元にも及ばないと感じる場面が多々ありました。「追いつけ、追い越せ」とは言えませんが、心に残るお話をたくさんいただきました。それらは、今後の活動において大きな糧と確信しました。

3　モノづくりの楽しさと、電気工作の可能性

かつては、無線機をパーツから自作するのが当たり前だった草創期から、現在では高性能な通信機を購入する時代へと移り変わってきました。そんな中でも、電気工作はアマチュア無線・電気・モノづくりのすべてに通じる大切な要素です。

渡島檜山支部では、青少年のための科学の祭典で「ラジオ作り」を行っていますが、今回はそれ以外に新しいモノづくりとの出会いがたくさんあることがわかりました。

特に感銘を受けたのは、市販のキットを組み立てるだけでなく、子どもたちにどんな力を育てたいか、難易度は適切か、予算はどうか、といった点を丁寧に考えながら、構成を練り、パーツを集めてオリジナルキットを作り上げる凄腕の方々との出会いでした。その姿勢には、頭が下がる思いです。

今回の学びを活かし、今後は必要に応じて諸先輩方に連絡を取りながら、より楽しく、わくわくするようなモノづくり企画を立てていけたらと思っています。

青少年の「やってみたい！」を引き出す場づくり、それこそが、アマチュア無線の未来を育てる一歩なのかもしれません。

4　非常通信体制と組織の連携について思うこと

先日のカムチャッカ地震の際、各

支部の体制について社員メールでお尋ねしましたが、ほとんど返信がありませんでした。その後、非常通信関係のブースを回っていたところ、「メール、よく見ていますよ」と声をかけていただく場面もありました。「それなら、ぜひ反応してほしい…」という気持ちもありましたが、大人の世界には、そう簡単に動かない事情もあるようです。とはいえ、今回いくつかのブースでは、直接お話を伺うことができたのは大きな収穫でした。

たとえば、横浜市 18 区のように行政としっかり連携が取れている地域もありましたし、全国的に定期訓練を行っている組織もありました。そうした話を総合的に聞いて、ふと考えたことがあります。「それは違うっしょ」と言われるかもしれませんが・・・。災害時に、誰がリーダーシップを取るのかが曖昧だと、「何、勝手にやってるの！」というような混乱が起きかねないのではないかと感じました。

私たちの多くは JARL に所属しています。発生する災害の規模にもよりますが、JARL 本部、地方本部、支部、支部内の非常通信組織、などが、関係団体や行政の窓口となって情報を共有する体制が望ましいのではないかと、改めて感じました。

災害時こそ、信頼と連携が試される場面です。今回の経験を通じて、事前の準備と意思疎通の大切さを強く実感しました。

地元の渡島檜山支部非常通信ボランティアにおいても、日頃の意識化を大切にするため、情報を流したり、訓練をしたりしていくことの大切さを改めて感じました。

5　研修

どんな仕事でも、最初はやり方を覚えて、しっかり取り組むことが大切です。次の段階では、より効率的な方法を学び、工夫するようになります。「学ばなければ成長はありません。」これは、趣味にも通じることだと思います。

私はよくこう話します。四アマ・三アマは「アマチュア無線を楽しむ立場」、二アマ・一アマは「楽しむ立場」に加えて「アマチュア無線を守る立場」。この「守る立場」は、ライセンスの有無だけでなく、クラブや支部などでリーダーを務める人にも当てはまると感じています。

では、「アマチュア無線を守る立場」とは、どんな役割なのでしょうか。いろいろあると思いますが、私が一番大切だと感じるのは、アマチュア無線の楽しさを次の世代につなげていくことです。そのほかにも、会員が無線から離れないように、さまざまな仕掛けを作ること、新しい技術を紹介していくこと、幅広い楽しみ方を多くの人に伝えていくことなどが挙げられるのではないでしょうか。

私自身、小さな支部のリーダーの一人です。今回東京に出かけたの

も、学ぶためでした。そして、多くのことを吸収して帰ってきました。リーダーにとって、学び＝研修はとても大切だと改めて実感しました。近隣の支部の活動をできるだけ見聞きするようにしていますが、距離の関係でなかなか難しい面もあります。

今回良かったのは、サテライト会場で実践発表が行われていたこと。とても素晴らしい取り組みだと思いました。ハムフェアには多くの支部長が参加されていると思いますが、いくつかの支部が実践成果を発表する場があれば、私なら絶対に行って勉強したいと思います。今は、社員メールもありますし、次は、月に一度、ZOOM で支部の実践報告を共有する場があればいいなあと感じました。

令和 6 年の企画書を単に令和 7 年に書き換えるだけでは、成長はありません。一年の間にも情勢は変わります。良い企画でも、一工夫加えること、うまくいかなかったらゼロから再構築する姿勢が必要だと思います。

「研修」と聞くと、少し堅苦しく感じるかもしれません。でも、新しい学びを取り入れてうまくいったとき、「参加者はもちろん、企画した人が一番うれしい。」これは、いつの時代も変わらない真理だと思います。

6　ハムフェアの学びと出会い～まとめに代えて～

今回のように、忘れないうちに振り返ってまとめておくことも、自分にとっての研修の一つだと感じています。今回も「行って良かったなあ」と心から思えました。

ブースに立ち寄ると、「佐々木さん！交信したことありますよ」と声をかけてくださる方が多く、驚きと嬉しさがありました。珍しい苗字や印象的な交信内容だと記憶に残りやすいですが、「つながったことがあるようですね。ありがとうございます」といったやりとりで終わってしまうことも多かったです。60 歳を過ぎると、なかなか人の顔や名前を覚えるのも難しくなりますが、一つ一つの交信には手を抜かず、心を込めてお話するようにしています。

持参した名刺は 100 枚。残りは 30 枚ほどだったので、70 枚人とお話し、名刺をお渡ししなかった方も含めると、100 名近くの方とお話できたのではないかと思います。

会場には無線に興味のある方ばかりなので、並んでいる途中や、隣で食事をしている方にも自然に声をかけることができ、言葉のキャッチボールができたのも嬉しい経験でした。

健康を保って、来年もまたハムフェアに参加したいと思っています。今回のような出会いや学びを、これからの活動にも活かしていきたいです。

（2025/8/25～29 執筆 佐々木 朗）